

1 全体の傾向

1 年齢別の外傷発生件数・頻度

発生件数について、男子では、小学校高学年(10～12歳)が最も多く年間36,958件発生していました。次いで、小学校低学年(7～9歳)が14,531件、中学生(13～15歳)が12,435件でした。女子については、男子と同様に小学校高学年(10～12歳)が最も多く14,553件、次いで、40代(40～49歳)が12,197件、30代(30～39歳)が7,685件でした。

発生頻度について、男子では、小学校高学年(10～12歳)が最も多く10万人当たり3,875件発生しました。次いで、大学生(19～22歳)が3,439件/10万人、中学生(13～15歳)が2,856件/10万人でした。女子については、40代(40～49歳)が4,413件/10万人で最も多く、次いで、50代(50～59歳)が4,019件/10万人、小学校高学年(10～12歳)が3,636件でした。

2 部位と外傷の種類

手・指の突き指が最も多く全体の約20%を占めていました。次いで、足関節捻挫が全体の約15%、膝関節における捻挫・靭帯損傷が約6%でした。また、脳振盪を含む頭頸部の外傷は約10%に見られました。

3 年齢別の部位と外傷の種類

部位別の割合について、未就学児(0～6歳)は頭頸部、小・中学生(7～15歳)は手・指と足関節が最も多くを占めていました。高校生以上の年代では、手・指や足関節に加え、膝関節の割合が高いという特徴が見られました。

外傷の種類について、中学生まで(0～15歳)は骨折が、一方、高校生以上の年代(16歳～)では捻挫が最も多いという特徴が見られました。

全体傾向

1

外傷の発生件数は、男女とも小学校高学年が最も多かった（男子 36,958 件、女子 14,553 件）

2

外傷の発生頻度は、男子は小学校高学年において 3,875 件 / 10 万人、女子は 40 代が 4,413 件 / 10 万人で最も高かった。

3

①手・指の突き指、②足関節捻挫、③膝関節の捻挫・靭帯損傷

4

未就学児：頭頸部、小・中学生：手・指と足関節、高校生～：手・指、足関節、膝関節

5

未就学児～中学生：骨折、高校生～：捻挫



※ 本章のページの各種データは平成24年度スポーツ安全保険の支払実績をまとめた「スポーツ傷害 統計データ集」より抜粋

2 サッカー

1 年齢別の外傷発生件数・頻度

発生件数について、男子では小学校高学年(10～12歳)が最も多く、年間14,307件発生していました。次いで、小学校低学年(7～9歳)が6,921件、中学生(13～15歳)が4,803件でした。女子については、男子と同様に小学校高学年(10～12歳)が最も多く720件、次いで、30代(30～39歳)が375件、40代(40～49歳)が361件でした。

発生頻度について、男子では大学生(19～22歳)が最も多く、10万人当たり4,816件発生しました。また、小学校高学年から高校生の年代(10～18歳)において約4,000件/10万人で推移しているという特徴が見られました。女子については、男子と同様に大学生(19～22歳)においてピークが見られました(4,650件/10万人)が、小学校高学年(10～12歳)では2,622件/10万人、中学生～50代の年代(13～59歳)では3,000件/10万人以上を推移していました。

2 部位と外傷の種類

足関節の捻挫が全体の約12%と最も多く、骨折や靭帯損傷を含めると足関節の外傷は全体の約19%を占めていました。次いで、手・指の骨折が全体の約10%、手関節の骨折が約7%など、上肢の骨折が多く見られました。また、脳振盪を含む頭頸部の外傷は全体の約9%に見られました。

3 年齢別の部位と外傷の種類

部位別の割合について、未就学児(0～6歳)は頭頸部、小学生～大学生(7～22歳)は足関節、20代以降(23歳～)は膝関節が最も多いという特徴が見られました。また、中学生以下の年代(0～15歳)では上肢の外傷が多く見られました。

サッカーにおける特徴

1

外傷の発生件数は、男女とも小学校高学年が最も多かった（男子 14,307 件、女子 720 件）

2

外傷の発生頻度は、男女とも大学生が最も高かった（男子 4,816 件/10 万人、女子 4,650 件/10 万人）。

3

①足関節の捻挫、②手・指の骨折、③手関節の骨折

4

未就学児：頭頸部、小～大学生：足関節、20代～：膝関節



3 野球

1 年齢別の外傷発生件数・頻度

発生件数について、男子では小学校高学年(10～12歳)が最も多く、年間8,595件発生していました。次いで、中学生(13～15歳)が3,326件、小学校低学年(7～9歳)が2,538件でした。女子については、男子と同様に小学校高学年(10～12歳)が最も多く284件、次いで、小学校低学年(7～9歳)が100件でした。

発生頻度について、男女とも概ね10代が高く、特に小学校高学年(10～12歳)において男女とも最も高い頻度が見られました。加えて、男子では中学生(13～15歳)の発生頻度も高いことから、競技レベルが未熟な小学校高学年から中学生にかけて外傷に注意するべきと言えます。

2 部位と外傷の種類

手・指の骨折が最も多く、全体の約19%を占めていました。

上肢における外傷発生の割合が全体の約46%と他の競技(全体傾向：約37%)に比べて高く、一方で、下肢の割合は約26%で他の競技(全体傾向：約43%)よりも低いという特徴があります。また、脳振盪を含む頭頸部の外傷は約20%発生しており、これは他の競技(全体傾向：約10%)よりも高い傾向が見られました。

3 年齢別の部位と外傷の種類

部位別の割合について、未就学児(0～6歳)では頭頸部の外傷が半数以上を、小学生(7～12歳)では手・指が最も多くを占めていました。小学校高学年以上の年代(10歳～)では肩関節や肘、中学生からは腰の外傷の割合が高くなるとともに、高校生以上の年代(16歳～)では下肢の外傷の割合が高くなるという特徴が見られました。

外傷の種類について、すべての年代において骨折や挫傷・打撲の割合が高く、特に小学校高学年から中学生まで(10～15歳)は骨折の割合が40%を超えています。

特に、小学校高学年では肘、中学生から腰の外傷が増加していることから注意が必要です。また、高校生では腱損傷・断裂や肉離れが急増します。

野球における特徴

1

外傷の発生件数は、男女とも小学校高学年が最も多かった(男子 8,595 件、女子 284 件)

2

外傷の発生頻度は、男女とも小学校高学年が最も高かった(男子 3,845 件/10 万人、女子 1,832 件/10 万人)。

3

手・指の骨折が最も多い。全体の傾向よりも、頭頸部や上肢の外傷が多く、下肢が少ない。

4

未就学児：頭頸部、小学校高学年～：肩関節や肘、中学生～：腰、高校生～：下肢



4 バスケットボール

1 年齢別の外傷発生件数・頻度

発生件数について、男女とも小学校高学年(10～12歳)が最も多く、男子が年間4,168件、女子が6,412件発生していました。次いで、小学校低学年(7～9歳)において、男子が1,043件、女子が1,220件でした。

発生頻度について、バスケットボール全体で10万人当たり4,378件発生しており、これは他競技(全体傾向)の約2倍に相当します。特に、男女とも小学校高学年(10～12歳)において最も高い頻度が見られました(男子6,395件/10万人、女子8,993件/10万人)。加えて、男子では大学生(19～22歳)、女子では大学生～50代の年代において高い発生頻度が見られました。

2 部位と外傷の種類

手・指の骨折や突き指などの外傷が最も多く、全体の30%以上を占めていました。次いで、足関節における捻挫や靭帯損傷の割合が全体の約20%、膝関節の捻挫や靭帯損傷が約7%見られました。なお、脳振盪を含む頭頸部の外傷は、他競技よりも低い割合ながら約7%発生していました。

3 年齢別の部位と外傷の種類

部位別の割合について、手・指と足関節における外傷はいずれの年代においても高い割合が見られました。また、未就学児(0～6歳)は頭頸部の割合が高く、高校生の年代から膝関節の傷害が増加するという特徴が見られました。

足関節の捻挫について、10代における発生件数が全体の70%以上を占めます。特に小学校高学年における発生件数・頻度が高いことから、同年代において足関節捻挫の初回受傷が多いと推測されます。また、バ

スケートボールにおける重症事例の典型例として、膝関節の靭帯損傷・断裂は10～20代の年代で全体の約70%を占めました。発生件数は小学校高学年が最も多かったのですが、発生頻度は大学生が最も高いという特徴が見られました。

バスケットボールにおける特徴

1

外傷の発生件数は、男女とも小学校高学年が最も多かった（男子4,168件、女子6,412件）

2

外傷の発生頻度は、男女とも小学校高学年が最も高かった（男子6,395件/10万人、女子8,993件/10万人）。

3

①手・指の骨折や突き指、②足関節捻挫や靭帯損傷、③膝関節の捻挫や靭帯損傷

4

すべての年代：手・指や足関節、未就学児：頭頸部、高校生～：膝関節

5

10代（特に小学校高学年）：足関節捻挫、大学生：膝関節の靭帯損傷・断裂



5 柔道

1 年齢別の外傷発生件数・頻度

柔道における発生件数は5,715件で、他の競技に比べると多くはないのですが、発生頻度(4,793件/10万人)は他競技(全体傾向：2,190件/10万人)の2倍以上でした。男女とも、小学生～40代において高い頻度が見られ、特に、小学校高学年～大学生の年代(10～22歳)において高い発生頻度が見られました。

2 部位と外傷の種類

部位別の割合について、特定の部位が突出して多いということはなく、足・指、膝関節、手・指、胸腰部、肘・前腕、肩関節・上腕および足関節において、いずれも10～16%の割合で外傷が発生していました。

外傷の種類は、捻挫と骨折が全体の70%以上を占めていました。このうち、足・指の骨折、鎖骨の骨折、足関節捻挫、手・指の骨折や膝関節の捻挫が多く見られました。なお、脳振盪を含む頭頸部の外傷は、他の競技よりも低い割合ながらも、約5.5%発生していました。

3 年齢別の部位と外傷の種類

未就学児(0～6歳)では鎖骨や足・指の骨折が多く、小・中学生の年代では部位に関わらず骨折と捻挫が全体の70～80%を占めました。また、小学校低学年(7～9歳)から頭部の打撲が増加するという特徴が見られます。高校生の年代からは骨折の割合が減少し、捻挫が増加します。さらに、肘や膝関節の靭帯損傷が多く見られるようになります。20代では捻挫がさらに多く見られ、他の年代に比べて脱臼が多いという特徴が見られました。

柔道における特徴

1

外傷の発生件数は少ない（5,715件）が、発生頻度が高い（4,793件/10万人）。

2

外傷の発生頻度は、男女とも小学校高学年～大学生において特に高かった。

3

部位に関わらず、捻挫と骨折が全体の70%以上を占めていた。

4

①足・指の骨折、②鎖骨の骨折、③足関節捻挫、④手・指の骨折、⑤膝関節の捻挫

5

未就学児：鎖骨や足・指の骨折、小学校低学年～：頭部打撲、小学生～中学生：部位に関わらず骨折と捻挫



6 ラグビー

1 年齢別の外傷発生件数・頻度

ラグビーにおける発生件数は年間3,657件で、他の競技に比べると多くはないのですが、発生頻度は10万人当たり5,480件にも達し、これは全体傾向の2.5倍に相当します。

男子の発生頻度は5,859件/10万人で、特に大学生(19～22歳)において最も高く22,258件/10万人でした。これは同年代における全体傾向の約6.5倍に相当します。女子の発生頻度は1,613件/10万人で、これは他競技の発生頻度(全体傾向：2,382件/10万人)よりも少ないのですが、ピークが見られた高校生については4,000件/10万人にも達しており、これは他競技(1,184件/10万人)の約3.4倍に相当します。

2 部位と外傷の種類

手・指の骨折が最も多く全体の約12%、次いで足関節捻挫が約6%、膝関節の靭帯損傷・断裂と胸腰部の骨折が約5%でした。また、脳振盪を含む頭頸部の外傷は約17%見られました。

また部位(頭頸部、胸腰部、上肢、下肢)に関わらず、発生頻度は他競技(全体傾向：2,190件/10万人)の2～4倍にも達しており、特に頭頸部や肩関節・上腕における発生頻度が高いという特徴が見られました。

3 年齢別の部位と外傷の種類

未就学児～小学生(0～12歳)では、上肢の外傷が多く、特に未就学児(0～6歳)は肘関節周辺の外傷(骨折、脱臼、捻挫、挫傷・打撲)が多く発生していました。小学生(7～12歳)では手・指の骨折が多く見られました。中学生(13～15歳)では上肢、次いで下肢の外傷が多く見られました。上肢では手・指の骨折と肩関節・上腕の脱臼、捻挫、骨折、下肢では足関節の骨折、捻挫、靭帯損傷が多く見られました。16～29

歳の年代では下肢の外傷が多く発生しており、主に膝関節の靭帯損傷や足関節捻挫が多く見られました。上肢は肩関節・上腕の脱臼や捻挫が多く見られました。これらの外傷はタックル動作に起因すると考えられます。

ラグビーにおける特徴

1

外傷の発生件数は少ない（3,657件）が、発生頻度が高い（5,480件/10万人）。

2

外傷の発生頻度は、男子は大学生において22,258件/10万人、女子は高校生が4,000件/10万人で最も高かった。

3

①手・指の骨折、②足関節捻挫、③膝関節の靭帯損傷・断裂、④胸腰部の骨折

4

他の競技に比べて、頭頸部や肩関節・上腕における外傷の発生頻度が高い。

5

タックル動作に起因する外傷が多いと考えられる。

